地方から書店と本をめぐる「熱」を次代につなぐ

―直木賞作家の挑戦―

Interview

歴史小説・時代小説家／書店経営者

今村 翔吾（いまむら しょうご）さん

1984年生まれ，京都府出身。小学生の頃に読んだ『真田太平記』をきっかけに小説家を志す。ダンスインストラクターや滋賀県守山市での埋蔵文化財調査員などを経て，専業作家となる。2016年，『蹴れ，彦五郎』で伊豆文学賞最優秀賞を受賞。以降，数々の作品で文学賞を重ね，2022年には『塞王の楯』で第166回直木三十五賞を受賞。作家として活躍する一方で，本・書店文化を未来へつなぐ仕組みづくりと人材育成にも注力。地方の書店「きのしたブックセンター」（大阪府箕面市），「佐賀之書店」（佐賀市）の経営に携わるほか，2024年には東京・神田神保町にシェア型書店「ほんまる」を開業。「一般社団法人ホンミライ」代表理事としては，「秘境の文筆家」，「日本ドラフト文学賞」などのプロジェクトを通じて，次世代の作家育成や地域に根差した書店文化の再生に挑んでいる。

［取材・文］ **勝田 慶** 中小企業診断士　［写真］ **石田 紀彦** 中小企業診断士
［店舗画像提供］ **ほんまる**

――The prologue

娯楽の多様化，電子書籍の普及，ネット書店の台頭などにより，「本屋」が私たちの日常から静かに姿を消しつつある。全国の書店数は過去20年で約半減，特に地方や郊外ではその傾向が顕著だ。加えて，業界特有の構造的ハードルから，書店は「儲からない」仕事とみなされ，次世代を担う人材を遠ざけている。

それでも，書店を必要とする人は今もたしかにいると感じられる。偶然の出会いを楽しむ場，地域の文化交流や学びの場として，書店の価値を見直す動きが各地で広がっている。

そんな書店文化の価値を社会に問い直し，次世代につなぐべく，「書き手」から「売り手」へと越境した作家がいる。直木賞作家・今村翔吾氏だ。地方書店の事業承継を皮切りに，法人・個人が表現の場として使える「棚」を貸し出すシェア型書店「ほんまる」を開業。次代の担い手を育てる仕組みづくりにも挑戦している。

作家，経営者，そして「本と書店を愛する人」として――今村氏が挑戦し続ける背景と，見据えるこれからを伺った。

チームで書き
地方で仕掛ける作家業

――「塞王の楯」のモデル地である大津市を拠点にされている理由を教えてください。

前職をきっかけに移り住んだ滋賀県が好きだというのが大きな理由です。あえて外から東京や国の中心を俯瞰して見ることで，新たな創作のネタが見えてくることもあります。

一方で，作家という仕事を１つの「ビジネス」として捉えたときでも，地方にいることは多くの利点があります。原稿のやり取りは以前は編集者が取りに来たりしていましたが，今ではメールで済みますし，必要があれば３時間程度で東京にも行くこともできます。東京と比べて家賃などの固定費も抑えられるので，仕事の場としても理にかなっていると感じています。

さらに，東京で活動しているとなかなか難しいような行政との連携や地域とのつながりを生かした活動ができる点でも，作家としての自分の希少価値をより高められています。それらを総合的に考えると，地方にいることのメリットのほうが圧倒的に大きいですね。

現在，「秘境（ひきょう）の文筆家（ぶんぴつか）」というプロジェクトで宮崎県の椎葉村と業務提携して，地域おこし協力隊のシステムを活用した専業作家の育成にも取り組んでいます。今後，作家の仕事は大きく変化し多